論考

アサガオの家族になってお世話をしよう

～疑似子育てによる生活科の栽培単元～

松村英治
（小学校教諭）

1　はじめに
～幼小連携の視点から見た栽培単元

近年、幼児教育と小学校教育の連携（以下、幼小連携）の重要性が注目され、さまざまな活動が展開されており、小学校においてその中核となるのは生活科である。これまでの幼小連携は、幼児と児童の交流活動やスタートカリキュラムなど、「何か特別なこと」を新しく始めなければならないという意識が強かったのではないだろうか。しかし私は、幼小連携の視点から従来の生活科を見直し、ちょっとした工夫によってリニューアルを図ることで、児童の発達や成長に大きく寄与するものと考えている。

幼小連携の視点とは、簡単に言えば低学年児童の発達段階を十分に踏まえるということである。一般に低学年児童は、幼児期の特徴を残していると言われている。例えば、無生物に生き物的な性格を与えるアニミズム、自分を中心として考える自己中心的傾向、興味・関心に基づく行動などである。

これらの特徴は、低学年児童の良さであり面白さである。これを適切に活かして単元を構想することで、児童はより生き生きと活動するようになり、その活動が学習として深まっていくはずである。

松村英治（まつむらえいじ）
東京都足立区立千寿常東小学校教諭。東京大学大学院教育学研究科博士課程。

2　指導・支援における工夫や手だて

本稿で紹介するのは、小学校一年生の生活科の栽培単元「おおきくなあれ～わたしのあさがお」（五月～十一月）である。低学年児童の発達段階を踏まえて、次の三つの工夫や手だてを行うことにした。

①疑似子育ての方法

疑似子育てとは、自分のアサガオのお父さんやお母さん（家族）になって栽培する方法である。ただ水やりをするだけではなく、毎朝「おはよう」と声を掛けたり、「大きくなってね」と話しかけたりすることで、アサガオと自分とのかかわりが深まっていく。

②必然性のある活動

生活科の活動は、児童と教師の思いや願いをすり合わせながら展開されるべきである。「アサガオを育てましょう」「水やりに行きましょう」といった教師の一方的な指示では、児童は主体的に活動できない。そこで、日常生活の中の児童の姿やつぶやきをきっかけにしたり意図的に仕掛けを作ったりして、児童にとって次の活動に必然性を持たせていく。

③必ず成功する体験

児童は、「できた！」という自信によって、次の活動では「こうしたい！」という意欲が生まれてくる。今後の飼育・栽培活動へと思いや願いをつなげていくためにも、小学校に入学して初めての栽培活動はぜひ成功体験としたい。そのためには、児童の植木鉢を教師自身が毎日欠かさず見て、一人ひとりに適切な指導・支援をしていく必要がある。

3　実践の経過

○常東小を花いっぱいにしよう（四時間）

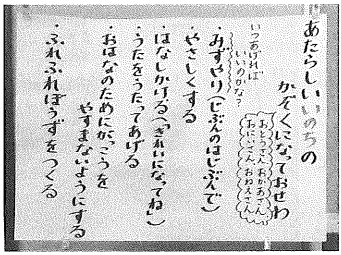
・栽培単元を始めるきっかけ

単元のスタートは、ゴールデンウィーク明けの気温が上がった暑い日。校庭の春や夏を見つける活動を通して、児童は「前は菜の花やチューリップがあったのに、なくなっちゃったよ」「常東小からお花がなくなっちゃう」「一年二組が育てるしかない！」「お花を育てる授業がしたい！」という思いを持った。

そこで登場したのが、校長先生である。校長先生はアサガオの種を児童に配って、出張授業をしてくださった。『みんなは何のためにお花を育てたいの？』『お花の種と道端に落ちている石ころ、何が一番違うかわかる？』と問いかけてもらったことで、児童は「きれいな小学校にしたい」「みんなを喜ばせたい」「種にはお花を咲かせる命があるんだね」「温かい気持ちになったよ」「大切に育てるからね」と、種まきへの気持ちを膨らませていった。

・疑似子育てに対する意欲を高める話し合い

道徳の時間には、読み物資料『いのちのこえ』を読んで、自分が校長先生から預かった種の声を聴いた。「早く土に入れてよ」「君よりも大きくなるよ」「大人になりたいな」という声を聴いた児童は、「種はお花の赤ちゃんなんだ！」「僕が新しい命のお父さんになるよ」「私はお母さんになりたい」と語り始めた。ここで、アサガオの世話の仕方を話し合った。

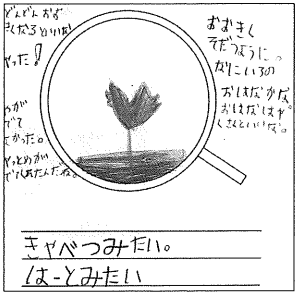


それから、植木鉢と土を児童に手渡した。種まきの日は土曜参観の日に設定し、保護者の方から子育ての大変さやうれしさについて話していただいたあと、外へ出た。児童は、土をベッドのようにふかふかにして、優しく穴を開けて声を掛けながら種を植え、大事そうに水やりをしていた。

○お世話をしよう（六時間＋常時活動）

・長期の世話のスタート～芽が出たころ

植木鉢は、児童が登校してくる校門から昇降口までの間に置いて、毎朝自然と目が向くようにした。私もできる限り、毎朝植木鉢の近くで児童を待ち、アサガオの成長の様子を見て会話をするようにした。そこでの児童の気付きを朝の会や生活科の授業の始めに紹介したり、児童に発表させたりすることによって、「僕のアサガオも

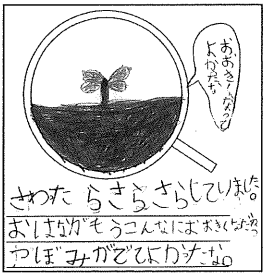


そうだったよ」「私のはどうかなあ？」「今からみんなで見に行こうよ！」と観察する必然性が児童の中に生まれるようにした。

芽が出た時の児童の喜びは非常に大きい。芽の様子を見立て言葉や絵で表現するだけではなく、芽が出たうれしさやほっとした思い、今後の成長への期待や願いが書かれていた。

・本葉が出たころ

双葉と本葉との違いへの気付き、自分のアサガオの成長の早さへの驚きがあった。このカードを書いた児童だけではなく、学級全員が新しい小さな葉をつぼみだと考えていた。私はそれを訂正せずに見守っていると、翌週、「つぼみが葉っぱになった！」と成長の様子に気付いていった。

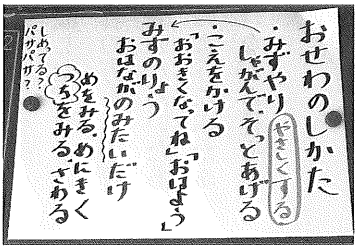


・支柱を立てるころ

六つの種をまいた植木鉢は、六月の始めには「からまって」「重なって」「あふれそうになって」くる。ここでは全員一斉に芽を移植したり支柱を立てたりさせず、どうすればいいかを児童に考えさせた。すると、「仕切りを作ってお部屋を分ける」「半分くらい別の植木鉢に移す」「棒を立てる」などの意見が出たので、どれを実行するかはそれぞれの児童に委ねた。数日たつと、どの児童も芽を牛乳パックの空箱に入れて持ち帰ったり、支柱を立てて蔓を絡ませたりしていた。

・世話についての振り返り

長期の飼育活動では、児童の意欲が停滞する時期が必ず来る。そのような時には、世話の仕方について振り返ったり、アサガオになりきって自分に手紙を書いたりした。ある児童は「いつもお世話してくれてありがとう。明日もあげ



てね。棒も立ててくれてありがとう。暑くても水をくれてありがとう」と書いていた。

・蔓が伸びてきたころ

六月の終わりごろになると、アサガオの蔓が伸びるだけではなく、児童の言葉の力も伸びてくる。「ジャックと豆の木みたい」「蔓が恐竜の顔みたい」と例えを上手に使って表現したり、「棒に巻き付いてよかった。棒を立てた意味があった」と自分の行為に対するアサガオの働き返しに気付いたりしていた。

○アサガオ市を開こう（三時間＋国語二時間）

・アサガオと自分の自慢の伝え合い

つぼみがたくさんできて花が咲き始めたころ、児童に「朝顔市」の写真を見せた。何をしているかを話し合うと、「おじさんが自分のアサガオの自慢をしているのではないか」ということになり、自分たちも土曜授業で保護者に自分のアサガオと世話の仕方の自慢を伝えたいという思いを持った。そこで、国語「しらせたいことをかきましょう」と関連させて発表原稿を書き、発表する活動を行った。「私は毎朝見てあげています」「ちょうどいい量の水をあげています」など、自分の頑張りを伝え合った。

○種採りをしよう（五時間）

・たくさんの種が採れたころ

夏休みが明けると、次々に種ができ始める。「先生！　種が採れたよ」と伝えに来た児童を学級の前で紹介したり、「袋に入れておくといいね」「たくさんあるけど、幾つになったの？」と声を掛けたりすると、水やりの時に楽しそうに種を採って袋に入れたり、自分から数えたりするようになった。

十分に種が採れたころ、種を数える授業を行った。袋から出した

り入れたりする、机の上に一列に並べる、十のまとまりにするなど、思い思いの方法でじっくりと種を数えた。そして、わかった数を書いた画用紙を黒板に貼って、気付いたことを話し合った。

初めは「三百個もできた人がいてすごい！」「でも十個ぐらいの人もいる」など表面的な気付きに留まっていたが、『どうしてこんなに種ができたの？』『どうして種の数はみんな違うの？』と私が問い返していくにつれて、「自分で水やりをしていたから、たくさんお花が咲いて、たくさん種もできた」「アサガオが自分の子どもにたくさん花を咲かせてほしいと思っていたからだと思う」「植える時の種がみんな違ったから、できた種の数も違う」「できた種の数が違って当たり前。人間もそうだから」「人間だってアサガオと同じで、背も、走る速さも違う」と自分とのかかわりの中で考えて、気付きの質が高まっていった。

ある児童は、この話し合いの後に、「種の数ってこんなに変わるんだなーって思う。みーんな性格が違うから自然も同じ。ママってこんなに頑張っているんだなってわかった。いつもやる水やりが大変。だけどできた」とカードに書いていた。疑似子育てによる栽培活動を通して、自分の親への感謝の気持ちを抱くようになっていった。

○思い出いっぱいありがとう（三時間）

・アサガオが枯れてきたころ

種が採れなくなり葉や茎が茶色くなってくると、これからアサガオをどうするかが話題になってくる。入学前の経験や兄・姉の話などから「リースにして残したい」という考えが出た。しかし問題になったのは、いつ抜くかということである。当初、学校公開期間中に保護者の手を借りながら行うことを考えていたが、当日の授業の始めに「まだ生きている」「まだ抜きたくない」という意見がたくさん出たため、急きょ中止にしたこともあった。しかし十一月になり、アサガオがあまりに乾燥するとリースにもできなくなってしまうので、私もそのことを児童に伝えながら抜く日を相談していった。

そしていよいよアサガオを抜く日、児童は茎や蔓が切れないように優しく丁寧に抜いていた。抜くためにかかったのはたっぷり二時間である。その後リースを作って、思い出が残るようにした。

・児童がつくる単元のエンディング

単元の最後は、児童から「これまでに頑張ったことを書きたい」「アサガオに手紙を書きたい」「絵を描きたい」などの意見が出たので、私は白紙のカードのみ用意して、活動は一人ひとりの児童に託した。

「これまで頑張ったことは水やりとハジメ（アサガオの名前）を抜くことです。ハジメが自分より大きかったから大きくなっていると思いました」

「僕は根っこを抜くのが大変でした。いっぱい水をあげたからこんなに抜くのが大変だったかな」

4　おわりに

本稿では、従来の生活科を幼小連携の視点からリニューアルすることを提案してきた。幼児期の特徴を残している低学年児童の栽培活動を充実させるためには、一言で言えば、発達段階に応じた教師の適切な指導・支援が欠かせない。例えば、種まきの前に児童の思いや願いをたっぷりと耕しておくことで疑似子育てに対する意識を高めておくこと、児童の姿やつぶやきをきっかけにしたり意図的に仕掛けを作ったりして次の活動への必然性を持たせて主体性を引き出すことが、具体的な活動や体験を豊かにし、さらに、表現し考えることで学習として深まっていく。

最後に、生活科で大切なことの一つは、教師自身が楽しむことである。アサガオの成長に関心を持つだけではなく、「『ふれふれぼうず』を作ってあげるなんて素敵だなあ」「新しい葉をつぼみだと思うなんて面白い。このまま見守ってみよう」と低学年児童の行為や言葉の豊かさや奥深さを楽しみ味わうことで、生活科がさらに魅力的な教科になるだろう。